

北九州 歴史文化遺産

北九州の知られざる史実を
独自取材で記した
記事の集大成です。
ぜひお手にとってご覧下さい。



- ◆発行 一般社団法人 北九州シニア応援団
- ◆執筆 村田和夫 ◆A4サイズ87ページ
- ◆価格 1,500円(税込)

読めばこの町が
もっと好きになる!



ご購入・お問い合わせ
さくら編集部
TEL 093-965-6080



小倉藩主小笠原家の菩提寺、
広寿山福聚寺に立つ島村志津摩の墓碑



かつて、この金辺峠(香春町)を拠点に長州藩軍と戦った、島村志津摩の功績をしのんで立てられた碑

幕末の小倉藩士・島村志津摩 藩、民の救難に尽力

幕末、小倉藩は外国船への対応をめぐって隣接する長州藩と対立していた。長州の尊王攘夷二色に対して小倉藩は幕府の指示に従い、外国船が攻撃してきた場合にのみ打ち払う方針。一方で長州藩は朝廷が攘夷期日とした文久3年(1863年)5月10日、関門海峡停泊中の米国船を砲撃したのを皮切りに、同月下旬には海峡通過中のフランス汽船オランダ軍艦、米国軍艦を砲撃。この時は長州軍艦2隻も撃沈されるなど、6月には報復に来たフランス軍艦からの砲撃で大きな損害を被るなどした。

このような時である。元治元年(1864年)、長州が薩摩、会津連合軍との争いに敗れた禁門の変が起き、幕府が長州征討令を発した。小倉は長州征討軍の基地化し島村志津摩が小倉藩軍の一番備(そなえ)の士(さむらい)大将となった。時に31歳。実は島村家は藩中老の家柄で父は十左衛門、母は

小倉城自焼の真相は

長府藩家老迫田伊勢之助の息女クニ。志津摩は1852年に家督を相続して小倉藩家老となり、藩政改革に取り組んだ。一旦辞職し1861年に復職したものの、当時の九代藩主忠幹(ただよし)の弟で藩主相談役の敬次郎に「母は長州ではないか」などと疎なまれ再び職を辞していた。だが士大将として慶応2年(1866年)長州との小倉口での戦いに奮戦。同年8月1日の小倉城自焼後、金辺峠(田川郡香春町)に後退して配下たちと共に立てこもって長州勢と戦った。その時の戦いの様子等は広く伝わり、名声を博した。同年12月には三度目、家老に就任し、長州藩との戦いの終結に尽力した。

倉藩家老の小宮民部が、独断に近い形で実行したもので、島村志津摩らは自焼後に知らされた。北九州市立自然史・歴史博物館の守友隆学芸員は「竹崎は、長州勢と戦った後に小倉城から撤退したならば敗軍(敗北)とみなされるので、一戦に及ばず、長州勢が押し寄せる前に自焼し、速やかに要地に撤退するのがよい」と提案した。それを小宮はもつともな意見として受け入れた」とする。

自焼後、島村志津摩は金辺峠、同じ家老の小宮民部が狸山峠(京都郡菟田町)に出陣し、小倉に進出してきた長州勢と断続的に戦闘を続けた。戦い前半は、(小倉藩から見れば長州征討という)「公戦」とするも、8月1日以降は「私戦」となったこの戦いは10月21日

は難航。長州藩側の人質要求に対して小倉藩側は自領全て放棄し藩士家族全員が他国移住という開国策を提起したという。これには長州側が驚愕し要求を取り下げたとされる。

小倉城自焼の後、小倉軍はかえって強くなったとされる。「青柳隊、松本隊など島村志津摩によって小倉城自焼後に新たに編成した下士と農民の混成部隊の活躍による」といわれ、抗戦のエネルギーがここに蓄積されていた、と原田茂安氏(「愁風小倉城」著者)は分析している。島村は家老職を辞した後も藩の元老として重んじられ、明治9年(1876年)8月、隠棲先の京都郡二崎(現・菟田町)で没した。

シニアスタッフ 村田和夫